

〈5歳クラス Ⅸ期 4・5月〉 「自分からかわろうとする姿を支える」

これまでの保育の様子

5歳クラスの幼児にとって、久しぶりの屋外遊びになる4月。屋外中心に遊びが展開させることを願って、テラス脇の棚にはすり鉢やボトル、虫かごなどを用意し、テラス前にはシートを敷いて、テーブルを並べる環境構成をした。そして、教師は、幼児が安心して遊べるように、幼児のやりたいことをよく読み取り、寄り添っていこうと副担任と援助の方向性を確認していた。自転車やブランコなどの遊具で遊ぶ幼児、カナヘビやオタマジャクシなどの生き物捕まえをする幼児、おうちごっこをする幼児など、これまでに経験してきた遊びを拠り所にして、友達とかかわりながら遊びを楽しんでいるように捉えた。

途中転園してきた幼児にとっては、附属幼稚園において初めて春の遊びにふれることになる。どんな遊びをしようかと様子をうかがう幼児もいれば、春の自然に興味をもち、生き物捕まえなどに夢中になる幼児もいた。A児は周りの様子をうかがいながら、1人で遊んでいることが多かった。周りの幼児がどんな道具を使って、どのように遊んでいるのかを観察しているようであった。4月中旬、A児は砂と水を混ぜ、それをプラコップに入れて、色の違いを比べていた。

4月18日

A児：「先生、お花がほしいんだけど、このお花とってもいいの？」

教師：「どうだろうね。誰か知っている人いないかな？Bちゃん、何かAちゃんが困っているみたいなんですよ」

B児：「どうしたの？」

A児：「お花がほしいの。これとってもいいの？」

B児：「あっちにいっぱいあるよ。行く？」

A児：「うん」

3歳保育室付近の砂場まで走っていく。

B児：「ここのなら、いいよ」

A児：「これもいいの？」

B児：「うん。いいよ」

A児は花を摘み、コップに入れる。

教師：「ここならたくさんあるね。よかったね、Aちゃん」

A児：「うん」

教師：「Aちゃんは、このお花で何をしたいのかな？」

A児：「お花のお水をつくるの」

B児：「私、ちょっと向こうに行ってくるね」

A児：「うん」

B児は、別の場所に遊びに行く。

この日、A児は4歳クラス児が花をすり鉢ですりつぶし、色水をつくっている様子を見ていた。その時のA児の表情や「お花がほしい」という言葉から、A児は花を使って色水をつくりたいという思いをもっているのではないかと読み取った。5歳クラスの幼児の中には昨年度、花の色水づくりを経験している幼児も多くいたので、この遊びがA児にとって他の幼児とかかわるきっかけになるのではないかと考え、B児とつなぐ援助をした。B児は、A児の思いを聞き、花のある場所やそこにある花はとってもよいことを知らせた。教師はそのあとも幼児同士がかかわりながら遊ぶことを願って、A児が花で何をしたいのかを共有しようと考え、A児にそれを聞いてみた。しかし、B児はそのことを聞いた後、別の場所に遊びに行った。教師は、B児は他にやりたいことがあるのではないかと捉え、それ以上声をかけることはしなかった。その後、A児は集めた花を持って、1人でテラス前で色水づくりをしていた。その表情からは、花びらをすりつぶすことで水に色がつくことを楽しんでいるように見えた。

その日の振り返りで、A児にとって、この幼稚園での春の遊びが初めてであり、それを新鮮に感じ、まずは1人でじっくり試したいのではないかと共有した。教師は、他の幼児とかかわりながら遊んでほしいと願って、つなぐ援助をしたが、A児にとってはまだそのタイミングではなかったと捉え直した。今後、A児が自分がしたい遊びを楽しむ中で、他の幼児とかかわっていけるように見守っていこうと話合った。そして、A児の遊びが他の幼児の目線に入るように、5歳クラス児がよく通るテラス前にテーブルを置いた。他の幼児がA児の使っている道具と一緒に使えるように、屋外の棚に幼児が自由に使えるプラカップやたれびんを入れたり、色水づくりで使えそうな茶こしやすり鉢を幼児の目線に入りやすい位置に移したりして、A児の好きな色水づくりが他の幼児の目に触れるように、環境構成を更新した。

5月2日

A児：「見て」

教師：「わあ、今日はどんな色になるのかな？」

A児：「緑だよ」

教師：「へえ。どんな色になるのか楽しみだな」

A児が葉っぱを鍋に入れ、色水をつくっているところに、C児が通りかかる。

C児：「何してるの？」

A児：「葉っぱで緑の水をつくってるんだよ」

C児：「へえ」

C児はA児が鍋をかき混ぜているのをじっと見ている。

C児：「私もやりたい」

A児：「いいよ。これ、やってみる？」

C児：「うん」

A児：「これも使っていいよ」

C児：「ありがとう。どうやるの？」

A児：「ちょっと貸して。こうやって入れてから、棒でおすの。」

そうすると、出るでしょ」

教師：「へえ、これでそんなことできるんだね」

C児：「本当だ。私もやる」

A児：「いいよ。はい」

C児：「わあ、できた。わたしもこれほしい」

A児：「わかった。まだあっちにあるから、これ使ってもいいよ」

C児：「ありがとう」

A児は、5歳保育室のテラス前で連日のように花を使った色水づくりをしていた。いろいろな色の花を集めてきては、すり鉢ですりつぶし、できた色水をたれびんに入れて並べ、色の違いを楽しんでいた。この日もテラス前で色水づくりをしていた。鍋に葉っぱを集め、水を入れてかき混ぜた後、茶こしを使ってボトルやたれびんに色水を集めていた。教師は、A児が鍋や茶こしなどの道具を使っていること、花ではなく葉を材料にしていることで、これまでとは違った色水づくりを試していると捉えた。このやり方で色水をつくることは、他の幼児も試したことがなかったため、他の幼児の目に留まり、かかわりにつながるかもしれないと考え、近くで見守ることにした。しばらくすると、近くを通りかかったC児が、A児に声をかけた。すると、C児がA児のやっていることに興味を示し、2人のやりとりが始まった。A児は自分が使っていた道具を貸して、それまで自分が試してきたことをC児に伝えた。そして最後には、自分が使っていた道具をC児に譲ると、自分は棚から別の鍋やたれびんを持ってきて、隣で一緒につくり始めた。そのあとも、2人でできた色水を見比べたり、道具のやりとりをしたりしながら、笑顔で色水づくりを続けていた。

この日の振り返りで、幼児同士のかかわりがうまれるように、テラスの環境を整えたことで、A児のしていることが、C児の目に留まったのではないかと話し合った。また、この日A児がこれまで使っていたすり鉢ではなく、鍋や茶こしを使っていたこと、花ではなく葉を材料としていたことが、C児には魅力的に映ったのではないかと振り返った。そして、テラス前という場所が、遊びに向かう幼児が必ず通る場所であったことが自然なかかわりにつながったのではないかと捉えた。教師は、A児にかかわりの中で遊んでほしいという願いはあっても、かかわりがうまれるような環境を整え、見守ることが自然なかかわりにつながるのではないかと考えた。そして、A児がこれまでじっくり試してきた色水づくりであるので、他の幼児とかかわりながら遊んでいけるのではないかと考え、この遊びが広がるように願い、屋外の棚にある道具の位置を幼児の見やすいように並べ替えたり、保育室に木の実や葉っぱの図鑑を置いたりして、環境を整えた。

5月16日

A児：「Bちゃん、一緒に木の実集めしよう」
B児：「いいよ。今日もいっぱいだろう」
A児：「うん。入れ物持ってくるね」
B児：「うん」
A児：「持ってきたよ。緑はこっち、赤はこっちにする？」
B児：「いいね。そうしよう。緑はシャインマスカット、赤はサクランボだね」
A児：「いいね」
4歳クラスa児：「私もほしい」
B児：「いいよ」
A児：「好きなもの持って行っていいよね」
B児：「うん、いいよ」
4歳クラスa児：「やったー。これください」
B児：「さくらんぼですね」
A児：「どうぞ」
4歳クラスa児：「ありがとう」
4歳クラスa児はコップに木の実を入れ、A児が木の実をとっている様子をじっと見る。
4歳クラスa児：「私もとりたい」
B児：「いいよ」
4歳クラスa児：「でも届かないんだよ」
A児：「うーん。これとりたいの？」
4歳クラスa児：「うん」
A児：「じゃあ、ちょっと待ってて。Bちゃん、あれ持ってこよう」
B児：「いいね」
近くにあるベンチをA児とB児で運んでくる。
B児：「これでどう？」
A児が木の枝を引っ張り寄せる。
A児：「これで届く？いっぱいにとっていいよ」
4歳クラスa児：「うん」
教師：「aちゃん、よかったね。年長さんのおかげで、いっぱいとれたね」
4歳クラスa児：「うん！年長さん、ありがとう」
A児：「またとりたかったら、手伝ってあげるよ」
教師：「Aちゃん、Bちゃん、すごいね。aちゃん、喜んでたね」
A児：「うん。私は年長さんだからできるんだ」

前日、これまであまり自分から他の幼児に声をかけることのなかったA児が自分からB児に声をかけ、2人で一緒に桜の実を集め始めた。B児は、これまで保育室に置いておいた木の実の図鑑を開き、園庭などにある木の実と見比べたり、桜の実を集めたりしていた。A児にとってB児は、これまでテーブルの近くで色水づくりをしたり、道具を借りたりする存在だった。少しずつやりとりを重ねていく中で、A児はB児と一緒に遊びたいという思いをもつようになっていったのではないかと捉えた。自分から声をかけて遊び、B児から「また明日もやろう」と言われたA児は嬉しそうに「うん」と答えていた。

この日、朝から「今日はBちゃんと遊ぶんだ」と笑顔で話していたA児は、B児が登園するとすぐに声をかけた。教師は前日の様子やこの日のA児の言葉や表情から、B児と一緒に遊ぶことをとても楽しみにしているのだと読み取り、友達とかかわりながら遊ぶ機会になればと願い、近くで見守ることにした。2人は、前日に桜の実を集めていた場所へ走って向かい、桜の実を集め始めた。たくさん集めると実を色ごとに分け、シャインマスカットやさくらんぼに見立て、「ほしい」と言ってきた年下の幼児とお店屋さんのイメージでやりとりを楽しんでいた。

色水づくりの広がりをお願い、環境を整えたことがB児の木の実への興味につながる環境になっているのだと捉えた。教師は、幼児の楽しみを丁寧に読み取り、その楽しみにつながるような環境を整えたうえで、見守ることの大切さを改めて実感した。

さらに、木の枝になっている桜の実を自分でとりたいと言う年下の幼児の願いを叶えようと、2人でベンチを運んだり、木の枝を引き寄せたりして、年下の幼児が自分で桜の実をとれるようにしていた。教師は、年下の幼児が桜の実をたくさん集め、うれしそうにしている様子を見て、この経験がA児にとって、自信につながるのではないかと捉え、A児にも聞こえるように年下の幼児に声をかけた。4歳クラスa児の「ありがとう」という言葉は、A児にとってかけがえのない言葉になったのではないかと考える。「年長さんだか

らできるんだ」と言った時のA児の表情は自信に満ち溢れていた。

4月に他園の保育の様子を参観したことで、5歳クラスの自信につながる援助を意識することができた。A児がB児とのかかわりの中で、年下の幼児の思いを叶える経験ができたこと、それを教師が「育ちの姿」として意味付けできたことは大きな価値があると考ええる。

考察

IX期において願う育ちの姿として「友達とかかわりながら、一緒に遊びをつくり出そうとする」があげられる。教師は、4月初めに1人で遊ぶA児の姿を捉え、友達とのかかわりがうまれるようにと願って、友達とつなぐ援助を考えていた。しかし、A児はその後1人で黙々と遊ぶ姿が見られた。その姿から、A児にとっては友達と一緒に遊ぶことではなく、1人でじっくりと遊ぶことを楽しんでいるのではないかと捉え直し、まずはA児がやりたいことをじっくり試せるように環境を整え、いつか自分からかかわろうとする姿を願って、見守っていこうと援助の方向性を確認した。A児は土や砂、花や水などの材とじっくりと向き合い、自分のペースで遊びを続けていた。教師が先回りして他の幼児とつなごうとせず、そのときのA児の楽しみを読み取り、それを実現させるための環境を整え、見守っていたからこそ、自分のやりたいことを思う存分試すことができたのではないかと考える。そして、「やりたい」思いが満たされ、自信をつけたことによって、自分から友達を誘い、一緒に遊ぶ姿につながっていったのではないかと捉えた。

他園のカンファレンスに参加した年中クラス担任から、その園の職員が「かかわりを支えるためには、まずは幼児が自分のしたいことを存分に楽しむことが大切であること、そうすることで自然とかかわりがうまれてくるのではないかと語っていたという話を聞いた。まさに、A児の育ちの姿そのものであると考えられる。改めて幼児の思いを丁寧に読み取り、援助していくことの大切さを感じた。